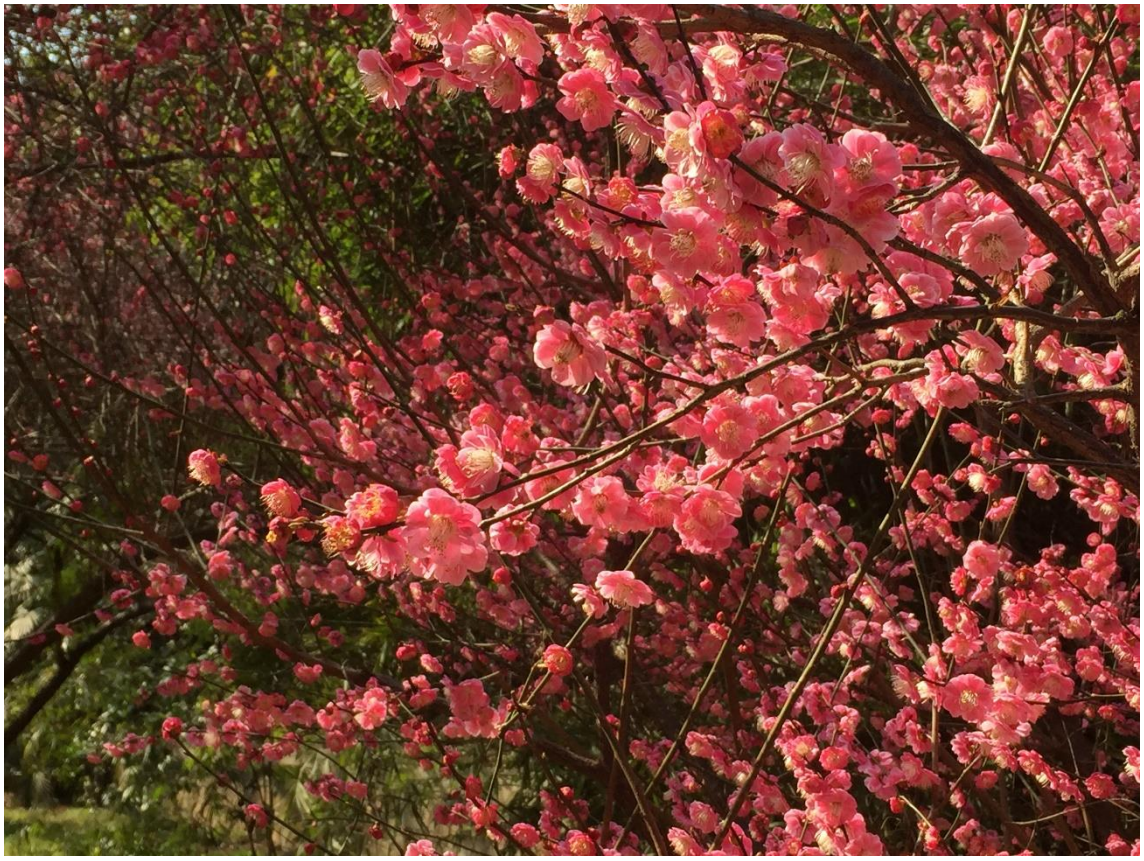
# 武漢大学留学報告



医学部５年　御代麟太郎

## 1. はじめに

今回私は 2 月 22 日から 3 月 30 日までの約６週間、中国武漢大学医学部へ留学をしてきました。このレポートでは中国での学習や日常生活などについて紹介したいと思います。

## 2. 武漢市/武漢大学について

武漢市は中国のほぼ中心部、華中と呼ばれる地域にある湖北省という省の省都です。上海市の西方約 800km に位置しています。あまり中国に詳しくない方にとっては武漢と言われても馴染みがないと思いますが、武漢市は人口 1000 万人を超える、中国でも有数の大都市です。春秋戦国時代は楚の国、三国時代は荊州として栄えた街であり、古来より交通の要衝とされてきた場所であります。現代でも華中エリアの政治・経済・文化の中心都市であり多くの高層ビルが立ち並ぶ一方、黄鶴楼を初めとする多くの観光スポットを持つ観光都市でもあります。気候は日本と同じく四季がはっきりとしており、夏は 40 度近くの酷暑になることから中国３大ボイラー(武漢・南京・重慶)と呼ばれることもあります。一方冬は寒く、私たちの滞在した３月の初旬には夜に雪が降ることもありました。また、春には桜の名所として、中国各地から多くの観光客が武漢市を訪れます。

メインキャンパスから中心部を望む

武漢大学は武漢市の武昌区という文教地区にあります。法学部・工学部・理学部・農学部・医学部など約 30 の学部からなり、学生数約 4 万 8 千人と、とても規模の大きい大学です。武漢大学は中国で最も長い歴史をもつ国立大学で、その起源は 1893 年創立の自強学堂にまで遡ることができます(北京大学は 1898 年、清華大学は 1911 年創立など)。中国の国家重点大学に指定されており、中国の大学ランキングでは常にトップ 10 以内に名を連ねるなど、国内外から高い評価を受けている大学の１つです。武漢大学医学部は 2000 年に当時の武漢大学と湖北医科大学が合併して、武漢大学となりました。そのため医学部のみメイン

武漢大学医学部正門にて

キャンパスとは離れた位置にあり、東湖という大きな湖を挟んで徒歩 30 分ほどの場所にあります。余談ですが、前述のように武漢市は桜の名所で、そのなかでも武漢大学メインキャンパスには 1000 本以上の桜が植えられていて、春の花見のシーズンには 1 日 10 万人以上の花見客が訪れ、とても賑わいます。武漢大学の日本の大学とは大きく異なる特徴の 1 つは、留学生が非常に多いということです。医学部にはインド・シンガポール・タイ・バングラデシュ・スコットランドや中東・アフリカ諸国など様々な国からの留学生がいて、キャンパスでは中国語・英語だけでなく、様々な国の言語が飛び交っていました。中国の大学は大学敷地内に学生寮を併設していて、学生たちは基本的にそこで生活しています。また中には小規模ながらスーパーマーケット(中国語では超市)が点在しており、たいていの日用品はそこで揃えることができるため、大学の中だけで生活することも可能です。中国人用の学生寮では 1 部屋で 12 人ほどの学生が一緒に生活しているそうで、ここもまた多くの人が一人暮らしをしている日本とは異なる点だと思いました。

キャンパス内は緑豊か

## 3. 学習

武漢大学留学中は、福島医大の基礎上級と同様に私たち 3 人の学生はそれぞれ別の研究室に配属することになりました。私は基礎医学院薬理学系講座に配属となりました。この研究室は学生数が 10 人ほどおり、それぞれの学生が教授に出されたテーマについて研究しているようでした。この講座の教授である柳静教授(Plof. YangJing)は以前、福島医大薬理学講座に 3 か月留学されたことのある先生で、とても優しく、武漢に来たばかりで右も左もわからない私に、福島の話などをしていただいたりしてくださいました。研究室には英語を話せる学生も数人いたため、何か困ったことがあった時にはよく助けていただき、また留学中はほぼ毎日昼食・夕食を一緒に食べたり、果物のおすそ分けをいた

後列左端が柳静教授。前列右端が滞在中私の身の周りのお世話をしてくれた研究生の湯紅林さん。

だいたりして、とても快適に過ごすことができました。この研究室では、主に薬物代謝に関わる重要な酵素である CYP を研究しているらしく、私は研究室の学部生とともに週に１回ほどウエスタンブロットや PCR の見学をさせていただいたり、実際に一緒に実験を手伝わせていただいたりしました。PCR は留学前の医大の基礎上級中に何度も行ったため、説明を受けなくとも行うことが出来ましたが、ウエスタンブロットについてはかなり忘れていたため、英語の説明を受けながら手ほどきをしていただきました。ちなみにこの研究室では 8 時半～11 時半が午前の部、14 時半～17 時半が午後の部、18 時半～22 時が夜の部という構成になっており、私はいつも朝 8 時半くらいに研究室に来て、夜は 8 時くらいに帰るという生活を送っていました(もちろん授業や実験があったときはこの限りではありません)。

中国人学生向けの薬理学(総論)の授業

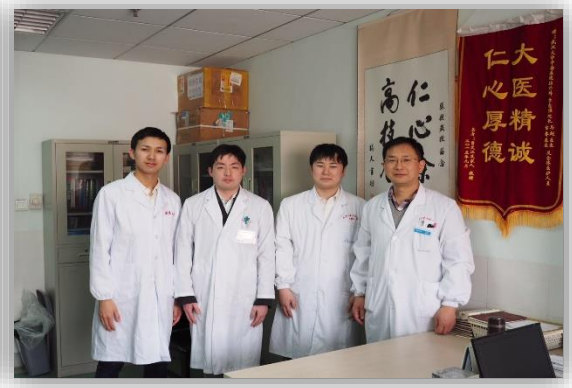
また、週に１回ほど、学部生向けの薬理学の授業に出席することになりました。私は留学生用の授業かと思っていましたが、なんと中国人学生用の授業でした。従って授業は全て中国語で行われたため、先生のおっしゃっていることは何もわかりませんでした。しかし授業は日本と同じようにパワーポイントを使ったものだったので、スライドの漢字から話題は理解できたため、日本から持ってきた薬理学の教科書を使いつつ、なんとか着いていけるよう頑張りました。この授業以外にも、同じ研究室の学生に誘われて、Biology や Bioscience の授業と、Clinical Pharmacology の授業にも参加させていただきました。これらの授業もやはり全て中国語で行われたものでしたが、彼女が逐一英語に訳してくれたのでいくらか理解できましたし、中国の大学の雰囲気を知るにはとても面白い経験でした。また、留学中何度か外国人留学生の授業にも参加させていただきました。こちらは全て英語で行われます。私は主に Diagnostics と Radiology の授業に出ていました。初めは授業の内容についていけるか若干不安でしたが、先生の話す英語はとても綺麗で聞きやすく、内容も日本ですでに学んでいたため、すんなりと理解できました。個人的な感想ですが、留学生クラスは遅刻してきたり、来ても後ろの席でずっと話していたりする人が多く、中国人クラスの方がまじめに先生の話を聞

体育館はバドミントン専用(卓球台は３階)

いている人が多い印象でした(もちろん中国人クラスでも 3DS を持ち込んでゲームをしたりスマホをいじってる生徒もいましたが)。また先生は、どちらのクラスでも授業中によく生徒に質問をしており、そのおかげで生徒は緊張感を持って授業に参加できるようでした。ちなみに中国では授業は 1 コマ 45 分の授業が 2 コマ乃至 3 コマ連続で行われており、各コマの間の休みは 5 分と、日本よりも少し短めの授業時間でした。また日本の大学医学部のようなぎっしりとした時間割ではなく、どちらかというと他学部に見られるゆとりのある時間割となっていました。USB メモリを持っていれば授業後に先生に授業で使用したパワーポイントをいただけるようでした。私は持っていなかったのでもらいませんでしたが。また、留学中一度だけですが、仲良くなった中国人の友達に誘われて体育の授業にも参加させていただきました。体育の授業は日本と同じく１、２年生のみのようでした。体育で行うスポーツは卓球とバドミントンと、とても中国らしい種目であると感じました。私は卓球を選択しましたが、みなとても上手で驚きました。

留学中 2 回ほど武漢大学医学部の附属病院である中南医院で見学をさせていただきました。中南医院は病床数 2000 床ほどのとても大きく、複数の建物からなる大病院です。福島医大に留学経験のある先生方も多く、私たちは脳神経外科の張捷先生にお願いして、脳神経外科のカンファレンス、病棟回診、手術などを見学しました。病院の中は日本の病院ほどではないですが、清潔な印象を受けました。カンファレンスや回診は日本と変わりませんが、CT や MRI などの画像を患者のベッドの下に保管しているのは少し違和感がありました。手術室は「外科楼」という名前の別棟(余談ですが整形外科の手術室は「骨楼」という建物にありました)にあり、独立していました。室内や医療器械は福島医大のものと変わらない印象でしたが、ガウンの装着など

武漢大学中南病院(第二附属病院)




中南病院脳神経外科の張捷先生と

外科楼(渡り廊下の先は骨楼)

の清潔操作が少し雑であったり、手術中に電話をしているなど、日本ではあまり見かけない状況も目にしました。先生に説明を受けながら、手術用の顕微鏡で術野を見せていただくなど、有意義な経験をさせていただきました。なお中国は人口が多いため、一日の手術数も多く、外科の先生はとても忙しそうでした。そのため外科楼の中の手術室の近くには食事スペースがあり、手術の間の時間がある時などを見計らって先生たちや看護師さんたちは食事をとっていました。ここもまた日本とは異なっていて、とても面白く感じました。

## 4. 日常生活

**・寮について**

武漢大学留学中は、私たちは大学内に併設されている「迎賓楼」（インビンロウに近い発音）という施設に宿泊していました。ここは外国人専用の宿泊施設で、中国人学生ではなく留学生の為の宿舎でした。2 人部屋でトイレ・シャワー付きです。今回は 3 人だったため、私は 1 人で 1 部屋を使わせていただきました（前述のように中国人学生は基本的に 10 人以上の複数人で寮を使うため、1 人で使っていることに大変驚いていました）。部屋にはエアコンがありましたが効きは良くなく、滞在当初は 2 月だったため少し寒かったので、日本から持って行った湯たんぽは大変重宝しました（湯を沸かすための電気ポットはあります）。他に冷蔵庫・テレビ・洗濯機がありますが、テレビは壊れて何も映りませんし、冷蔵庫も少し臭いがしたのでほとんど使いませんでした。洗濯機はある部屋とない部屋がありましたが、私の部屋にはあったため、自分の好きな時に洗濯が出来て非常に助かりました。洗濯物は部屋干しをしなくてはならないので、洗濯ロープと固定するためのガムテープなどは必須です。コンセントの形状は日本の A タイプが挿せるものと 02 タイプが挿せるものの２つがありました。部屋には前者が 4 つ、後者が 2 つあり、日本からマルチプラグを持っていきましたが、結局ほとんど使わずに済みました。ただ他の 2 人の部屋は A タイプのコンセントのうち２つが故障して使えなかったため、やはり持っていくに越したことはありません。トイレに関

迎賓楼外観

内装は想像していたより綺麗

しては、紙は流せないので使った紙は便器の脇の汚物入れに捨てるように、と諸先輩方のレポートにはありましたが、私たちの時には日本と同じようにそのまま流せるようになっていたため、問題ありませんでした。しかし私の部屋では便器のタンク内に水が溜まっていないためボタンを押しても水が流れない、というトラブルが多々(1 日 1 回以上)ありましたが、これも日本から持って行った風呂桶に洗面所で水を溜めて流すという方法で対処出来ました。洗濯機を回すまでもない・洗濯機が壊れて動かないときにも風呂桶で洗濯ができたため、これも持っていくと良いと思います。お風呂に湯船は無く、シャワーのみです。シャワーに関しては特に不満はありませんでしたが、夜の 12 時を過ぎるあたりから水勢が弱くなり、1 時を過ぎるくらいには止まってしまったりするので、早めに浴びることをお勧めします。また部屋には Wi-Fi があり、研究室でも Wi-Fi を自由に使えたため、学内のネット環境には不満はありませんしたが、外で使いたいときや待ち合わせ場所に相手がこなかったときなどちょっとしたときに困ったこともあったので、もし可能であれば渡航前に Wi-Fi ルーターを借りておくと便利です。事前に聞いていた通り、LINE・Twitter・facebook などの SNS の他、Google や一部のウェブサイトなどは当局からブロックされており使用できませんでしたが、これは渡航前に VPN 接続の設定をしていたため、問題ありませんでした。有料 VPN でも１～２か月間は無料なので有料とは言いつつ実質無料、というところも多いのでぜひ設定することをお勧めします(無料 VPN は接続不良が多い)。中国ではこのような事情から LINE ではなく WeChat(中国語は微信 拼音:wei xin)という SNS が主流になっており、中国では LINE よりも使い勝手が良いのでこれは必ずインストールしておきましょう。知り合った中国人からは必ずと言ってよいほど「ID 教えて！」と言われます。

**・食事について**

食堂外観(左に見切れているのが迎賓

食堂内観(１階)

朝昼晩の食事は基本的には大学の学生食堂で食べることになります。医学部キャンパスには学生食堂は２つあり、私たちは主に迎賓楼の隣にある「学生一食堂」という食堂で食べ

ていました。食堂では学生カードを使って決済をする(カードに IC が内蔵されていてミールカードになっているとのこと)ため、私は研究室の学生からカードを貸してもらい、チャージが無くなったときにお金を渡してチャージしてもらっていました。どんぶり 1 杯分くらいのご飯が 0.6 元(約 12 円)、野菜・お肉・魚などの豊富なおかずが 1 つ 3 元～５元(60 円～100 円)ほどで、基本的に 2 種類を選ぶため、1 食の値段は約 10 元(約 200 円)と、とてもリーズナブルです。飲み物も豆乳 1 つ 2 元(約 40 円)、フルーツジュース 1 つ 3 元(約 60

注文の仕方(中央上の機械で決済)

ご飯の入ったカップにおかずを乗せる

円)と、こちらもお手頃です。食堂の職員さんには中国語しか通じませんでしたが、食べたい料理を指せばわかってもらえるので、たとえ 1 人でも問題なく食べることができます。私たちのお世話をしてくれていた学生はみな口を揃えて「あまり美味しくない」「食べ飽きた」「生きるためだけに食べる」などと散々なことを言っていましたが、初めて食べる私たちにとっては美味しかったです。しかし基本的にメニューはほとんど変わらないため、私たちも数週間食べただけで飽きてきてしまったので、数年間食べ続けている彼らの気持ちもわかる気がしました。なお、２階では麺料理な

第二食堂の蘭州牛肉麺

とても辛いラーメン

どが食べられますが、麺以外は口頭で注文する必要があるためなかなかハードルは高いです。ちなみにラーメンはものすごく辛いです。初めて食べた時は辛すぎてもう２度と食べないと思いましたが、数日後に無性に食べたくなる時があり、結局滞在中に５回ほど食べました。もう１つの第二食堂は、1 階は「学生一食堂」と変わりませんが、2 階はインド人留学生のためのカレーや、イスラム教徒であるウイグル人や中東出身の留学生の為の食堂になっていて様々な料理が楽しめます。しかし、ここは中国語で注文し、自分の注文した料理が出来たことを中国語で聞き取らなくてはならないので、中国人の友人と数回行ったのみで、1 人では一度も行けませんでいた。学内の食事は基本的に全て中華料理のため、途中から少し飽きてしまいました。そのため、武漢大学から徒歩 10 分ほどのところにある漢街(Han Street, 拼音:hanjie)という目抜き通りにあるマクドナルドやケンタッキー、スターバックスなどをたまに利用していました。また武漢にもいくつか日本食レストランもあり、日本食が恋しくなった時にみんなで１度だけ利用し、久しぶりの楽しみました。味は日本食そのものです。中国での食事に関して日本と異なる点はほとんどありませんが、中国では飲み物があまり冷えていないため、基本的にぬるいか温かい飲み物しかないというところは少し異なる点かもしれません。これは中医学的な考え方であるそうで、冷たいものを摂ると胃腸の働きが弱まり、病気になりやすいと考えられているためです。従って、例えば売店などで一見冷蔵庫に入って冷たそうに見えるジュースなども日本のように冷えておらず、少しぬるいです。最初はぬるい炭酸やビールなんてなんだか味気ないと思って飲んでいましたが、慣れてしまうと時々冷たい飲み物に遭遇したときに逆に驚いてしまいました。日本では冷たい飲み物を好んで飲んでいたため、よくお腹を壊していましたが、逆に中国では一度もお腹を壊さなかったので、確かに冷たいものの摂りすぎは良くないと考えるようになりました。もう一つ、これは個人的にとても不思議だったのですが、中国では温かい豆乳をストローで飲みます(前出の紙コップに入っている飲み物が豆乳。カップには変な日本語が書いてある)。出来立

中国の KFC(味はほとんど変わりません)

イオン武漢金銀譚店の日本食レストラン

ての豆乳はすこし熱いくらいなので、ストローで飲むととても熱く感じるので、やけどする人もいるのではないかと思いました。中国人の友達に何度か聞いてみても「普通でしょ？」という返事だったので、海外(中国)では普通なのかなと思い、追及するのを止めました。

**・買い物**

毎日の飲み水やお菓子、果物などの食品は大学内の超市(スーパーマーケットの意)で購入していました。超市は迎賓楼から徒歩1分の場所にあり、とても便利です。5つほど店舗が並んでいますが、私たちは主に右端にある「富強超市」という売店をよく使っていました。ここのお店のおばちゃんはとても優しい方で、武漢に到着した初日にオレンジなどの果物をくださったりしました。また私たちの顔も覚えてくれていたようで、売店に行くと「您好！」と挨拶をしてくれたりしました。この売店には食べ物以外にもトイレットペーパーや掃除用具など様々な日用品があり、生活の中で必要なものはたいてい手に入ります。また値段が聞き取れなくても電卓で値段を表示してくれるため、買い物で困ることはありませんでした。大学内の超市で欲しいものが手に入らなかったとき、私たちは学外の大きいショッピングセンターに買い物に出かけていました。漢街には万達広場という大きなショッピングセンターがあったり、武漢地下鉄4号線の楚河漢街(拼音:chu he han jie)駅があり、そこからイオンモールに出かけたりもしました。地下鉄の運賃は約4元(約 80 円)と、とても安かったので、私たちは頻繁に使っていました。余談ですが中国の地下鉄は乗る前に荷物をX線検査をしなくてはならず、少し面倒でしたが、買い物袋は通さなくて良いなど若干雑な印象を受けました。

超市(一番手前が富強超市)

漢街(外資系企業の店舗が立ち並ぶが、物価は高め)

**・大気汚染**

中国に関連して必ず出てくる話題と言えば PM2.5 による大気汚染だと思います。私も出発前にはかなり用心してマスクを 60 個くらい持っていきました。武漢市内はやはり空気は

あまりきれいでなく、晴れている日でも空はなんとなく白く、数百メートル先の建物が霧がかかったようにもやもやとして見えにくいという状況でした。滞在中 5 日間ほどは本当に汚く、すこし喉が痛くなったりもしました。初めの頃は外出するたびにマスクをつけていましたが、次第に面倒になり、結局使わなくなりました。たまに今日はとても汚いなと感じるときがあり、そのようなときは普段マスクを使わない現地の方もマスクを使用していたため、そのときは使うようにしていました。

## 5. 交流

留学中、武漢大学の先生方や中国人学生、留学生など様々な人々と交流することができました。初めは中国に対する漠然としたイメージから、反日的な生徒もいるのではないだろうかと少し心配していましたが、実際に中国人学生と交流してみてそれは杞憂だったと気が付きました。私たちが知り合った人々は日本に行ってみたい、日本のアニメや漫画が好き、日本の医療は素晴らしいので見習いたい等、日本に関して何かしら興味を持っている人が多いようでした。日本語を勉強している学生も多く、日本への留学に興味があると行っていた学生もいました。私はもともと中国の歴史や文化に興味があり、個人的に漢詩や中国の本(4 大奇書など)などを読むのが好きだったため、その事を中国人の友達に話してみると、とても喜んで、ことある毎に私に漢詩を送ってくれました。中国人・留学生に関わらず、私た

武漢大学メインキャンパスにて

武漢長江大橋にて、中南病院の冯先生と

ちが日本人だとわかると、「このアニメ知ってる？」などと気軽に声をかけてくれました。また、知り合った学生や、以前福島にいらしたことのある先生方は、毎週末ごとに私たちを観光に連れて行ってくれたり、食事に招待してくれたりしました。武漢市内の観光スポットである、武漢大学メインキャンパス、黄鶴楼、湖北省博物館、武漢植物園、武漢動物園、長江、武漢長江大橋、戸部巷など、本当に色々な場所を訪れることが出来ました。先生方はみな忙しそうでしたが、時間を見つけて私たちを観光に連れて行ってくださいました。福島に

いらしたことのある先生は、以前福島に行ったときに福島医大の色々な先生に日本の観光に連れて行ってもらったので、今度は私たちがもてなす番だ、とおっしゃっており、これは 1999 年から始まった福島医大と武漢大学の交流の歴史の賜物であると感じました。現地の学生の中にも去年や一昨年の福島医大からの留学生と交流をしたことのある学生もおり、そのような方たちにもとても良くしていただき、交流・友情の歴史を感じることが出来ました。

黄鶴楼にて、劉先生と

去年福島医大にいらした陳先生(前列右)と胡先生(前列左)

解剖学講座の先生方とバドミントン

留学生クラスのみんなとピザ

また今回の留学は約 6 週間と、今までの留学期間よりも少し長かったため、週末の休みを利用して武漢市以外の都市にも行くことが出来ました。その紹介も少ししたいと思います。

・赤壁市

赤壁市は湖北省の都市で、武漢市から約 120km ほど離れた位置にあります(120km と聞くとなかなか遠く感じますが、中国の感覚ではかなり近いそうです)。私は三国志が好きで、そのことを研究室での自己紹介のときに話したのですが、その時に教授が、赤壁か襄陽などは近いからぜひ行ってみて、とおっしゃってくれたのが旅のきっかけです。友達に話したところ快諾してくれ、同行してくれる中国人の学生も見つかったため、行くことが出来ました。目指すは三国赤壁古戦場です。208 年に曹操軍と孫権・劉備連合軍が戦った赤壁の戦いの舞台であり、三国志を少しでも知っていればおそらく必ず聞いたことのあるであろうとても有名な場所です。今ではテーマパークのようになっています。ここに行くには色々な交通手段がありますが、日帰り旅行であったため、高速鉄道(中国版新幹線)を使いました。数年前に事故が発生し、多少不安でしたが無事到着できました。中国の鉄道は外国人が乗る場合には身分証明としてパスポートがなければならないため、注意が必要です。「和諧号」は日本の新幹線の技術供与を受けて出来た車体だけあって、外装や内装はほぼ同じで乗り心地も快適でした。赤壁市は中国の田舎町という感じのところで、武漢市とはまた違った中国を見ることができました。

中国版新幹線「和諧号」

赤壁市の街並み

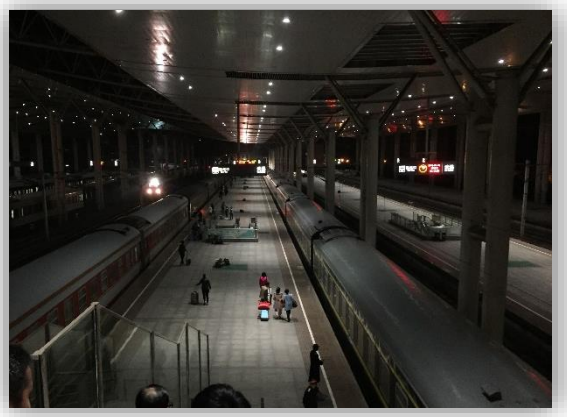
目指す三国赤壁古戦場はここからさらに 20km ほどのところにあり、タクシーとバスを乗り継ぎました(なおタクシーは中国ではとてもポピュラーな乗り物で、日本と比べてとても安いです)。三国赤壁古戦場の中はとても広く、全てをじっくりと見るためにはおそらく丸 1 日かかると思われる程でしたが、日程的には 3 時間ほどしかなかったため、一部しか見ることができませんでしたが、それでも当時の面影を残す建物や、ショーなどを見てとても楽しかったです。また、実際に戦いが行われた場所や、陣地が置かれてい

たとされている場所も見学でき、とても有意義でした。

赤壁古戦場にて。私の左にいるのが武漢大学１年生の周文潔(拼音:Zhou Wenjie)。
とても気の利く親切な人で、帰りにはお土産をくれた。

**・西安市**

西安市は湖北省の北西に接する陝西省の省都で、武漢市からは約 1000km の距離があります(東京～種子島間に匹敵)。中国の６大古都(北京・南京・西安・洛陽・開封・杭州)の１つであり、中国内でも美しい都市の１つとして知られているところであります。西安までは非常に遠く、私たちは行きは寝台車を利用して行きました。日本では寝台車はもうほとんど見



武昌駅にて乗車前

硬臥車(二等寝台車)の内部

られなくなってしましましたが、中国ではまだまだ現役で、高速鉄道の半額ほどで乗車できるため、庶民の足として活躍しているそうです。寝台車は初めてでしたが、中は意外と快適でした。予定では 12 時間ほどで到着する予定でしたが、前日に大雨が降った影響で電車が遅れ、結局 20 時間ほどかかって西安市に到着しました。西安は日本でいうところの京都・

奈良に似た地で、いくつもの王朝の首都になった地で、多くの観光名所を抱えています。今回は 2 泊 3 日という強行スケジュールであったため、その一部しか見ることはできませんでした。1 日目は華清宮と兵馬俑を見に行きました。華清宮(入場料は 75 元)は唐代に作られた離宮として有名で、皇帝や楊貴妃が入ったお風呂などを見学しました。

華清宮の中の様子

華清宮にて、諸星と

華清宮の後は兵馬俑を見るために秦始皇帝兵馬俑博物館に行きました。今回西安を旅行先に選んだのは、兵馬俑を見るためと言っても過言ではありません。秦始皇帝兵馬俑博物館は西安市の中心部からやや離れた位置にあり、バスを使わなければなりませんが、西安駅前のバスの停留所付近には悪質な白タクも多く、少し治安の悪い感じがしました。また武漢には

楊貴妃専用のお風呂・海棠湯

玄宗皇帝のお風呂・蓮花湯

外国人はほとんど居ませんでしたが、各国からの観光客が多いことも印象的でした。博物館の入場料は学割が効かず、150 元とやや高額ですが、それを払っても見る価値はあると思います。ちなみに中国では多くの観光地で学割が使え、しかも割引は 50%と、とても良心的

なので、学生証は忘れずに持っていきたいところです。忘れた友達はとても不便そうでした。

兵馬俑抗・一号抗

完全な形で発見された跪射俑

修復中の兵馬俑

馬型の兵馬俑

入場ゲート前には日本語を話せるガイドもおり、
解説を聞きたければ聞くことが出来ます(120 元/時間)。余談ですが、ガイドの方は私たちに流ちょうな日本語で話しかけてきました。私たちは多くの中国人に、日本人と中国人はとても似ているから、実際に話すまで日本人かどうかわからない、と言われていたので、すぐに日本人だとわかったことに少し驚きました。中は広く、一号抗から三号抗までの建物がありますが、二号抗と三号抗はまだほとんど発掘されておらず、これから発掘がなされるよう

でした。その他にも大雁塔や鐘楼など、多くの歴史的な建造物を見学したり、中国の少数民族である回族の回族街を訪れることが出来、とても楽しかったです。

大雁塔から西安市を望む

大雁塔にて、みんなと

回族街

鐘楼にて中国伝統音楽を楽しむ

ホテル近くの火鍋の露店で夕食

城壁の上をサイクリング

2 泊 3 日ととても短い時間でしたが、密度の高い旅でした。中国には本当に魅力的なものも多く、ぜひ滞在中は時間があれば色々なところを訪れることをおすすめします。

## 6. おわりに

約 40 日という短い留学期間でしたが、とても充実した期間でした。中国での生活を通じて、なかなか日本にいては体験できない多くのことを学ぶことが出来たと思います。異文化の中に身を置くことは、自分自身のことや日本を振り返る良い機会になります。私は日本に帰ってきて、さらに日本のことが好きになりました。さらに今回の留学では、私の中国観にも少なからず影響を与えたと思います。最近のテレビやネットでの中国に関するニュースと言えば、南シナ海での人工島や、中国人観光客の爆買いとそれに付随する観光客のマナーの悪さ、大気汚染など、正直に言ってネガティブなニュースしか触れる機会はありませんでしたが、実際に行ってみて、とても親切で良い人がいたり、留学最終日に別れを悲しんで涙を流してくれる人もいたりして、思っていた中国のイメージが壊れ、若干“親中”になって帰ってきました。そのことを中国人の友人に話してみたところ、中国人は 14 億人もいるから当然悪い人も多いけど、良い人ももちろん多いよ、と言われ、心の底から実感しました。また留学中には語学の重要性を感じ、今まであまり本気になって英語を勉強していませんでしたが、日本に帰っても英語の勉強を続けようと思いました。英語を話すことにより本当に色々な人と知り合ったり、友達になれたりして、当たり前のことですが、英語は世界語だと実感しました。

このレポートを読んで少しでも行ってみたいと思った方には、ぜひ留学してみて！と言いたいです。私はこれまで旅行以外で海外に行ったことなどありませんでしたし、ましてや一か月などどいう長い期間滞在したことはありませんでした。中国に行く前はとても不安でしたし、やっぱり申し込まなかった方がよかったかも、などと考えたこともありましたが、実際に行ってみて、帰ってくる頃には留学に行ってよかったと思えるようになりました。私のように海外にあまり行ったことのない方にとって、中国は留学しやすい国です。それはなにより福島医大と武漢大学の 20 年に渡る交流の賜物だと考えています。また費用の面でも渡航費や滞在費は全て大学持ちで、他大学の留学では留学費用が自腹であることを考えると、破格の待遇です。ぜひこの機会を無駄にしないでください。このレポートを読んで少しでも中国・武漢大学医学部への留学に興味を持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の留学にあたり、ご尽力いただいた免疫学講座の関根先生、システム神経科学講座の永福先生、企画財務課の国分さんに深くお礼を申し上げたいと思います。